

日本語を学ぶ中国人留学生の進路選択と留学生活満足感

—進路未決定時期と関連要因に着目して—

酒井 彩(お茶の水女子大学)

Foreign Chinese Students' Career Choice and Satisfaction of Life in Japan:
Focusing on Time of Career Indecision and Related Factors

Aya SAKAI (Ochanomisu University)

キーワード： 中国人留学生, 進路未決定, 日本語教師, 計画的偶発性

Keywords : Foreign Chinese Student, Career Indecision, Japanese Language Teacher,
Planned Happenstance

SUMMARY

The purpose of this study was to clarify that the time of career indecision and related factors had on the career choices and satisfaction of life in Japan of foreign Chinese students. In this study, current satisfaction of life in Japan was divided into two groups: "satisfied" and "dissatisfied." The three causes of this difference were the following: time of career indecision, career choice flexibility, and advisers and mentors.

1. 問題の所在と研究の目的

日本語学校に在籍する留学生の卒業後の主な進路は、大学院、大学、専門学校等への進学、就職、帰国である。留学生が日本語を学ぶ理由は、近年大きく変化している。しかしながら、日本語学校卒業後に大学等に進学する留学生数は、16,179名(財団法人日本語教育振興協会, 2015)に上り、卒業後の進路の約75%を占めている。このことから日本語学校に入学する最大の理由が大学等の高等教育機関への進学であり、日本語学校在学期間を進学のための準備期間としてとらえる(伊能, 2004)状況は、継続していると言えるだろう。

日本語学校における受験生活を終え、大学等で満足した留学生を送っている留學生がいる一方、不満を抱えた留学生を送っている留學生もいる。日本語学校から進学した留學生の留学生活の満足感に関して調査した研究に井上(1996)がある。

井上(1996)は、日本語学校を卒業し、大学等に進学した留學生97名を対象に質問紙調査を行った。その結果から、留學生の生活や発達を援助するためには、留學生自身の文化や社会関係、アイデンティティを尊重し、日本の学術、文化、社会関係の獲得ができるよう

な文化統合的な援助が必要であることが示された。

日本語学校同様に大学の別科は、進学予備教育機関である。別科から大学等に進学した留学生の留学生活の満足感に関する研究に館岡(2005)、三枝(2005)がある。

館岡(2005)は、中国人、韓国人、台湾人の別科生14名を対象としたアンケート調査で留学生生活全体の満足感と相関が高いのは、「目標達成」「経済」「日本語力」の順であることを明らかにした。つまり、留学生活の目標が達成され、経済的に安定し、日本語が上達すれば留学生生活全体の満足度が高くなると言える。

三枝(2005)は、別科生を対象としたアンケートで受験生活の満足感について尋ねた。その結果、受験生活に満足したかどうかは、希望の進学先への進学という結果だけではないことが明らかになった。受験生活に満足していた学生は、別科在学時の進路相談の利用度が高く、大学等への進学後の満足度が高いことも明らかになった。

これまでの研究から、留学生活の満足感は、現在の留学生活のみならず、それ以前の受験生活、その際に相談できる相手がいたかどうかにも影響を及ぼす可能性が明らかになった。

そこで、本研究は、外国人留学生の中でも日本語学校や大学等に最も多く在籍している中国人留学生を対象とし、どのように大学等進学前に進路を選択したり、決定したりしたか、現在の留学生活は、どのようなものか明らかにすることを目的とした。データを分析する過程で、留学生活の満足感に影響を及ぼす進路未決定時期とその関連要因は、どのようなものかという問いを設定した。

2. 対象者・方法

本研究は、日本語学校に通いながら受験勉強をし、2012年4月に大学等に進学した中国人留学生を対象に2012年7月から12月にかけてインタビューを行った。そのうち、日本で専門学校から大学に進学したり、大学から別の大学へ進学したり等、二度進学を経験していた者を除いた5名を対象とした。なお、進学前から進学後までの一連の流れを明らかにしたかったため、調査時点で進学をして1年以内の留学生を対象とした。

対象者の属性は、表1の通りである。対象者の性別は、男性1名、女性4名である。現在の年齢は21歳から26歳までである。来日前の立場に関しては、高校を卒業した者1名、大学を卒業した者2名、会社員であった者2名である。日本語学校在籍期間は、1年3名、1年半2名である。来日時の日本語能力は、中級2名、上級3名である。

表1 対象者の属性

対象者	性別	現在の年齢	来日前の立場	日本語学校在籍期間	来日時の日本語力
A	男性	24歳	会社員	1年	上級
B	女性	21歳	高校卒業	1年半	中級
C	女性	25歳	大学卒業	1年	上級
D	女性	26歳	会社員	1年	上級
E	女性	24歳	大学卒業	1年半	中級

対象者には、来日前から現在までの状況、進路選択についての考え方、現在の留學生活を中心に日本語で語ってもらった。インタビューの所要時間は、1時間半から2時間程度であった。インタビューは、対象者の許可を得て録音し、これを文字化したものをデータとして使用した。

データは、【来日前】【日本語学校在学時】【現在】という時系列にし、どのように進路選択、決定をしたか、現在の留學生活は、どのようなものか個別に整理した。その後、佐藤(2008)を参考に5名分のデータを比較・対照し、仮説を生成し、「現在の留學生活満足感に影響を及ぼす進路未決定時期とその関連要因は、どのようなものか」という課題を設定した。なお、本研究における進路未決定とは、下山(1986)、松尾・佐野(1993)、下村・木村(1994)を参考にし、「進路が決められず、模索している状態」と定義した。

3. 結果と考察

表2は、対象者5名A～Eのデータを左から順に【来日前】【日本語学校在学時】【現在】の順に整理したものである。

【来日前】という項目には、日本にどのような目的で留學をしようと思ったかという「留學目的」について整理した。対象者5名の「留學目的」は、高学歴取得2名、日本語・文化習得2名、目的不明1名であった。

【日本語学校在学時】という項目には、当時考えていた日本語学校卒業後の「進路の選択基準」、当時進路が決められず、模索している状態があったかどうかという「進路未決定」の有無、自分が当初考えていなかった進路も柔軟に検討したかどうかという「進路選択に対する柔軟性」の有無、進路を選択した際の「主な相談相手」、当時決定した「進路選択に対する満足感」について整理した。対象者5名の「進路の選択基準」は、知名度優先（進学先の知名度を優先して進路を選択する）2名、専門探索（希望する専門がなく、何が自分に適しているか相談しながら進学先を選択する）3名であった。「進路未決定」の有無に関しては、あり3名、なし2名であった。「進路選択に対する柔軟性」の有無に関しては、あり3名、なし2名であった。「主な相談相手」は、日本語教師3名、塾講師・先輩1名、なし1名であった。「進路選択に対する満足感」に関しては、全員満足であった。

【現在】という項目には、現在の「留學生活に対する満足感」、現在進路が決められず、模索している状態であるかどうかという「進路未決定」の有無について整理した。対象者5名の「留學生活に対する満足感」に関しては、満足3名、不満2名であった。「進路未決定」の有無に関しては、あり2名、なし3名であった。

分析を進める中で【日本語学校在学時】には、全員が「進路選択に対する満足感」を抱いていたにもかかわらず、【現在】の「留學生活に対する満足感」に関しては、不満である留學生と満足している留學生がいることが明らかになった。現在の留學生活に不満である留學生は、この留學生活から抜け出したいものの、具体的に何をすればいいかわからず、現在「進路未決定」の状態にあることが明らかになった。一方、現在の留學生活に満足している留學生は、【日本語学校在学時】に「進路未決定」の時期があり、現在留學生活に満足し、積極的に取り組んでいる状態であることが明らかになった。両ケースの違いとして、

【来日前】と【日本語学校在学時】に異なる進路選択や決定の方法が見られた。

そこで、【現在】の「留学生活に対する満足感」に着目し、A～Eを2ケースに分けた。A、Bは、ケース1【進路未決定時期が進学後である場合】、C、D、Eは、ケース2【進路未決定時期が日本語学校在学時の場合】である。これ以降、ケースごとにその詳細を述べ、最後に両ケースの差異が生じた要因として、【日本語学校在学時】の「進路未決定」「進路選択に対する柔軟性」「主な相談相手」に着目し、考察を行う。

表2 現在の「留学生活に対する満足感」に影響を及ぼす進路未決定時期と関連要因

対象者	ケース	【来日前】	【日本語学校在学時】				【現在】		
		留学目的	進路の 選択基準	進路未決定	進路選択に 対する柔軟性	主な相談相手	進路選択に 対する満足感	留学生活に 対する満足感	進路未決定
A	1	高学歴取得	知名度優先	なし	なし	なし	満足	不満	あり
B		高学歴取得	知名度優先	なし	なし	塾講師・先輩	満足	不満	あり
C	2	日本語・文化習得	専門探索	あり	あり	日本語教師	満足	満足	なし
D		目的不明	専門探索	あり	あり	日本語教師	満足	満足	なし
E		日本語・文化習得	専門探索	あり	あり	日本語教師	満足	満足	なし

両ケースの差異が生じた要因

3.1 ケース1：進路未決定時期が進学後である場合

ケース1は、【現在】の「留学生活に対する満足感」が持てず、この留学生活から抜け出したいものの、具体的に何をすればいいかわからず、現在「進路未決定」の状態にあるA、Bのケースである。それぞれどのような背景があり、来日し、日本語学校における受験生活を経て進学したのか詳しく見ていく。

3.1.1 Aのケース

Aは、中国の三年制大学でソフト開発を専攻した。大学卒業後にゲームの企画・運営をしている会社に就職した。Aは、その会社で待遇や出世の面で学歴が重要であることを痛感する事態に何度か遭遇した。そのため、高学歴を得たいと希望し、海外の学歴を得ることがその近道であると考えようになった。その後、1年間勤めていた会社を退職した。当初アメリカ留学を考えていたが、留学費用がかかることから断念し、同じ漢字文化圏であり、文化も近いことから親近感を持っていた日本に留学することを考えるようになり、来日した。

仲介業者の紹介で入学した日本語学校在学の期間は1年であり、この期間は、Aにとって受験勉強をするには短い期間であると感じていた。しかしながら、経済的事情からそれ以上の受験生活は、予定していなかった。大学等を選択する際の情報の少なさ、母国と異なる受験制度に戸惑うこともあったが、時間の制約もあり、迷う時間もなく、受験時期を迎

えた。Aの進路の選択基準は、知名度優先であり、学費が安く、英語の試験がないこと等の条件も考慮し、選択した。

日本語学校在学時には、決定した進路が悪くない進路であると思っていたが、いざ進学してみると大学生活や在学している大学生が入学前に自分が想像していたイメージと異なることに失望した。また、アルバイト先等で大学名を言っても知っている人が少ないことから、知名度の低さにも次第に失望するようになった。現在は、今通っている大学を辞め、英語の必要性に改めて気付いたこともあり、アメリカ留学をすることを考えている。あるいは、中国に帰国して起業し、経営者になるのもいいと思っているが、何をしたらいいかわからず悶々としている。

3.1.2 Bのケース

Bは、貿易業を営んでいる父の仕事の関係で幼い頃に父から日本について話を聞くうちに、次第に日本に興味を抱くようになった。中国で高校を卒業して来日し、日本語学校に入学した。

Bは、有名大学に入ることを希望し、日本語学校と並行し、中国人を対象とした大学進学塾へ通い、受験勉強に勤しんでいた。Bの進路の選択基準は、知名度と就職率であった。Bは、日本語学校は日本語を習うだけの場所であると考えていた。また、日本語教師と進学先に関する考え方が異なること、中国語のわからない日本語教師に日本語で意志をうまく伝えられないことから、日本語学校では、進学に関する相談を一切しなかった。一方、大学進学塾では、Bの進路の選択基準が知名度優先であるという考え方を理解してくれる中国人講師や中国人の先輩に進学に関する相談をしていた。

日本語学校卒業後に大学に進学してみると、周囲の学生の意欲の低さや大学の雰囲気イメージと異なることに愕然とした。そのみならず、調べていたはずの知名度や就職率が思ったよりも低いように感じ、大学に失望するようになった。Bは、このような状況から、現在を忍耐の時期であると考えている。高学歴を得るために他の大学編入や大学院進学も考えたほうがいいかと思っている。しかし、そのために具体的な行動ができず、悩んでいる。

以上のように、AとBは、「進路未決定」の時期を大学に進学した後に迎えた。AとBは、ともに「留学目的」が高学歴取得であり、日本語学校在学時の「進路の選択基準」が知名度優先であった。そのため、進路選択でさほど悩むことや相談をする必要がなかったという共通点がある。

3.2 ケース2：進路未決定時期が日本語学校在学時の場合

ケース2は、【日本語学校在学時】に「進路未決定」の時期があり、【現在】は、「留学生活に対する満足感」があり、留学生生活を謳歌しているC、D、Eのケースである。それぞれどのような背景があり来日し、日本語学校における受験生活を経て進学したのか詳しく見ていく。

3.2.1 Cのケース

Cは、中国で高校から大学に進学する際に両親の勧めである専攻を選択した。高校時代から日本語に興味を持っていたため、その専攻には全く興味がなかったが、両親を説得したり、反抗したりできず、その専攻を選び、大学で学んだ。中国で大学卒業後に日本で本当に興味がある日本語を学びたいと思い、両親を必死に説得した。やっと夢が叶い、来日し、日本語学校に入学した。

Cにとって日本語学校で日本語を学ぶことは、充実した日々であった。Cが充実した日々を送るある日、日中の文化差に関連するあるトラブルに見舞われた。それを日本語教師に相談し、アドバイスを受けるうちに日中の異なる文化に興味を持ち始めた。日本語を学ぶことは、日本語学校で実現できていたので、それまで日本語学校卒業後に進学することを考えたことがなかった。しかしながら、文化に興味を持ったことから、進学に向けて日本語教師に相談を重ね、受験を決めた。

希望の進学先に入学できた現在は、日々の人との出会いが楽しいと感じている。同級生や先輩の日本人学生に様々な影響を受け、専攻する文化に限らず、様々なことに対して興味が広がっている。

3.2.2 Dのケース

Dは、高校まで中国で過ごし、高校卒業後にニュージーランドに渡った。ニュージーランドの大学では、心理学を専攻し、卒業した。大学卒業後に中国に戻り、留学関連の企業に就職した。仕事は楽しかったが、やや気楽過ぎることが不満であった。「勉強になる仕事がしたい」「毎日進んでいく自分になりたい」と変化を求め、人生を変える最後のチャンスだからと反対する両親を説得し、来日した。

留学先として日本を選んだ理由に確固たるものはなかったが、英語に飽きたこと、日本文化への興味があった。日本語学校に通う目的は、特になかったが、日本に滞在し、日本の文化を知ることが楽しかった。このまま日本に滞在し続けたいと考えるようになり、日本語学校卒業後に受験をすることを考え始めた。しかしながら、進学して何を学ぶかは全く考えていなかった。日本語学校の教師から今までの専門である心理学と趣味を活かした専門学校や大学を勧められ、現在の進学先を見つけた。その後受験をし、希望の進学先に入学できた。

現在は、思いがけず大学時代の専門と趣味が融合したことが学べる機会に恵まれ、非常に満足した生活を送っている。

3.2.3 Eのケース

Eは、様々な視点から物事が見られるようになりたいと考え、大学で主専攻として英語、副専攻として財政学を専攻し、2つの学位を取得した。大学3年生の頃から日本語の音の響きが好きで興味を持ち始め、日本のアニメにも興味を抱くようになった。日本が中国と文化的にも距離的にも近いことから、来日し、日本語学校に入学した。

来日前には、日本語学校で日本語や文化を学ぼうと考えていたことから、日本語学校卒

業後に進学をすることは考えず、特定の専門にも興味を持っていなかった。日本語学校に入り、ある日本語教師との出会いがあった。そのことをきっかけに様々なことをその教師に相談をするうちに自分の興味と可能性を見つけ、進学先を見つけた。同時にアイデンティティを見つめなおすことができるようになり、この出会いが転機であったと感じた。Eは、初めて両親や進学先の知名度等の周囲の価値観ではなく、自分なりの枠組みで自分に合う進路を探ることが重要であると感じた。

現在は、「毎日生きる柔軟性が大切で、世界は変わりやすいから、そのときのチャンスと危機をとらえるのが現実的」と考えている。現在の指導教員は、親切で研究能力に優れていると感じている。周りの学生も勉学、生活両面で支えてくれ、充実した留学生活に満足している。

以上のように、C、D、Eは、「進路未決定」の時期を日本語学校在学時に迎えた。C、D、Eは、ともに留学目的が当初進学ではなかったものの、日本語学校在学時に様々な専門を柔軟に日本語教師と一緒に考えたという共通点がある。

3.3 現在の留学生活に対する満足感に影響を及ぼす進路未決定時期とその関連要因

ケース1：進路未決定時期が進学後の場合、ケース2：進路未決定時期が日本語学校在学時の場合ともに【日本語学校在学時】には、「進路選択に対する満足感」があったにもかかわらず、【現在】の「留学生活に対する満足感」「進路未決定」に違いがある。その要因として、【日本語学校在学時】の「進路未決定」「進路選択に対する柔軟性」「主な相談相手」に着目し、考察を行う。

第一に、ケース1と2とでは、【日本語学校在学時】の「進路未決定」に違いがある。ケース1の場合は、【来日前】の「留学目的」がいずれも「高学歴取得」という考え方であったことから、【日本語学校在学時】も「知名度優先」で進学先を選択、決定し、日本語学校在学時に迷う時期はなく、「進路未決定」の時期もなかった。一方、ケース2の場合は、【来日前】に進学について深く考えることはなかったことから、【日本語学校在学時】には「進路未決定」の時期を経験した。

進路に迷い、それを模索するという進路未決定の状態は、特に青年期においては誰にでも起こり得る重要な時期である。ケース2の場合は、【日本語学校在学時】にアイデンティティを見直すような価値観の変化や困難に直面したことを契機とし、多様な進路を検討することで決定した進路に納得し、進学後も「留学生活に対する満足感」を抱いているのではないだろうか。進路を決めず、模索している「進路未決定」の時期があることで日本語学校卒業後に満足した留学生活が送れる可能性があることから、「進路未決定」の時期は、決してネガティブにとらえる必要はなく、自らを振り返るためにも重要な時期であるといえるだろう。

第二に、ケース1と2とでは、【日本語学校在学時】の「進路選択に対する柔軟性」の違いがある。ケース1の場合は、「知名度優先」で進学先を選択していたことから、選択範囲を自ら狭めてしまった可能性がある。一方、ケース2の場合は、途中から進学することを考えていたDと、あまり進学することを考えていなかったC、Eがいるが、いずれもどのような

専門が自分に適しているか「専門探索」をしている。

異文化環境である日本において進路選択を行なう場合には、制度面の困難に直面する(村越, 2012)とともに、心理面の不安(加賀美, 1994)もある。そのため、進路未決定は、誰にでも起こる、進路を模索するための重要な時期である。その時期に自分が当初考えていなかった進路も柔軟に検討することにより、可能性が広がったり、真にしたいことが見つけられたりする可能性がある。「進路選択に対する柔軟性」があるということは、偶然を活かしたキャリアを模索する「計画的偶発性(Planned Happenstance)」(Levin& Klumboltz, 1999)という考えに通じるだろう。偶然を絶好の機会ととらえ、それを自らのキャリアに取り込んでいくためにも日ごろから柔軟な姿勢と積極的な行動の継続が必要である。

第三に、ケース1と2とでは、【日本語学校在学時】の「主な相談相手」の違いがある。ケース1のAの場合は、誰にも相談をせず、Bの場合は、中国人の塾講師や先輩に相談をしていた。いずれも日本語学校の教師には相談ができなかった。一方、ケース2の場合は、いずれも日本語教師が進路選択のキーパーソンであった。

これまでの研究において、日本語学校生にとって最初に進路に関する相談ができる相手は日本語教師(村越, 2012)であり、大学等進学前に在学した機関における進路相談の利用度が高いほど進学後の満足度が高い(三枝, 2005)ことが明らかになっている。ケース1の場合は、いずれも相談を試みようとしていたことから、今後は、日本語に自信のない留学生の言語面や心理面にも配慮したサポートが重要であろう。日本語教師に相談し、相談の機会をうまく活用することができれば、【現在】の「留学生活に対する満足感」が高くなる可能性がある。

4. まとめと今後の課題

本研究では、現在の留学生活に対する満足感に影響を及ぼす進路未決定時期とその関連要因を検討した。その結果、【現在】の「留学生活に対する満足感」に影響があるのは、【日本語学校在学時】の「進路選択に対する満足感」ではなく、【日本語学校在学時】の「進路未決定」の有無、「進路選択に対する柔軟性」の有無、「主な相談相手」である可能性が示唆された。

今後は、日本語学校において大学等進学前に進路について考える機会の提供と進路に関して留学生が気軽に相談できるような適切なフォローやシステム作りが必要である。それと同時に、すでに大学等に進学したものの、本当にこの進路決定でよかったのか悩んでいる留学生に対する適切な対応や相談、今後のキャリア形成に関与していく必要もあるだろう。日本語学校においても、大学等の進学先においても、個人のキャリア形成は、主体的プロセスであることから、キャリアを自ら切り開いていく主体性と自立性を育成する授業やそのような機会(たとえば、市嶋・長嶺, 2008; 遠藤・佐藤, 2008; 村越, 2013)を設けることも重要である。

これまで自分が将来就きたい職業を見つけ、その目標に向かって進路を決定する(宮城, 2006)ことが当然であると考えられ、「未決定を減らすこと」と「個人の特性と職業の特性の間の一致を増やすこと」が重要視されてきた。「未決定」であることは、「オープンマインド」であることであり、「個人の特性と職業の特性の間の一致」を重視しすぎることは、

同一職業内において様々な特性をもつ人々が成功し得ることや職業自体も変化し続けることを見過ごすことにつながる(渡辺, 2010)。これは進学という進路選択場面においても同様である可能性が本研究から示唆された。「計画的偶発性(Planned Happenstance)」のように偶発的なできごとを最大限に活用するためには、来日前から現在、現在から将来を連続的にとらえ、計画性を持ちつつもその時に応じた柔軟な行動がキーとなる。

最後に本研究の課題を述べる。本研究は、これまで明らかにされてこなかった受験段階から現在の進学先の留學生活に対する満足感を追うためにインタビュー形式を用いた。しかしながら、今後は本研究で明らかになった留學生活に対する満足感に影響を及ぼす進路未決定時期、進路選択に対する柔軟性、主な相談相手等の要因について量的な調査を行ない、進路選択の全体像を明らかにする必要がある。また、日本語学校から進学する以外にも多様な進学方法があることから、大学等進学前の進路選択、決定の仕方について属性ごとに比較調査することも必要である。

【引用文献】

- 遠藤ゆう子・佐藤正則(2008)「日本語学校での実践—新しいコミュニティを目指して—」『日本語教育はコミュニティ構築を実現できるか』9-14.
- 市嶋典子・長嶺倫子(2008)「「進学動機の自覚を促す」日本語教育実践の意義—レポート分析とエピソード・インタビューを基に—」『日本語教育論集』24, 65-79.
- 伊能裕晃(2004)「日本語学校における就学生支援—必要となる認識、活動、組織についての提言」『留學生教育』9, 169-180.
- 井上孝代(1996)「外国人留學生のアカルチュレーション態度と留學生生活の満足度」『東京外国語大学留學生日本語教育センター論集』22, 209-221.
- 加賀美常美代(1994)「異文化接触における不満の決定因—中国人の就學生の場合」『異文化間教育』8, 117-126.
- 松尾雄毅・佐野秀樹(1993)「職業未決定の類型と処遇—アメリカと日本における研究の概観—」『東京学芸大学紀要第一部門』44, 273-286.
- Mitchell, K.E., Levin, A.S. & Klumboltz, J.D.(1999) “Planned Happenstance: Constructing Unexpected Career Opportunities” *Journal of Counseling & Development*, 77-2, 115-124.
- 宮城まり子(2006)『キャリアサポート』駿河台出版社
- 村越彩(2012)「日本語学校に通う學生の進路サポート源—學生のとらえる理想的日本語教師像を中心に—」『人文科学研究』8, 133-145.
- 村越彩(2013)「中国人留學生の進路選択自己効力を高めるサポートプログラムの効果」『人間文化創成科学論叢』15, 163-171.
- 三枝優子(2005)「留學生の進路決定に関する調査」『文学部紀要』19(1), 103-129.
- 佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法』新曜社
- 下村英雄・木村周(1994)「大学生の就職活動における就職関連情報と職業未決定」『進路指導研究』15, 11-19.
- 下山晴彦(1986)「大学生の職業未決定の研究」『教育心理学研究』34, 20-30.
- 館岡洋子(2005)「留學生の学習動機・学習観・満足度 —別科中級クラスの学習者の場合—」

『東海大学紀要』 25, 27-46.

渡辺三枝子(2010)『新版キャリアの心理学—キャリア支援への発達的アプローチ—』ナカニシヤ出版

財団法人日本語教育振興協会(2012)『財団法人日本語教育振興協会日本語学校教育研究』